

目的語省略についての管見*

小野塚 裕 視

1. 導 入

この論文では、英語の目的語省略を扱ったいくつかの先行研究をもとにして、分類と構成員と動詞の相特性との関係という三点を取りあげ、気づいたところを述べる。

2. 分類の基準となる四つの要因

英語の目的語省略構文は、一般には大きく二つの類に分けられる。その一般的な分類の基準となる要因として、省略されているあるいは含意される目的語が定か、不定かという二つと、省略が動詞依存か文脈依存かという二つの併せて四つを挙げることができる。

2.1. 一般的な組み合わせ一定で文脈依存と不定で語彙依存

一定で文脈依存の型は定の目的語省略などと呼ばれていて、Lehrer (1970) や Allerton (1975, 1982) や Fillmore (1986) などの議論において認められるように、省略されたあるいは含意される定の目的語が言語的あるいは場面の文脈に存在するという意味で文脈に依存する。(1)がその例である。

(1) a. I tried to play the paino but I can't play well yet.

(Lehrer (1970))

b. I went to see the cricket. George was watching.

(Allerton (1975))

不定で語彙依存の型は不定の目的語省略などと呼ばれ、省略されたあるいは

含意される不定の目的語が対応する他動詞の選択制限をもとに狭く制限されていて、動詞によって決まるという意味で、動詞に依存する。

- (2) A: Are you hungry? There's some pizza left.
 B: No, I don't want to eat yet. (Rispoli (1992))

(2)のBが言っているのは何も(食べ物を)食べたくないということで、eatという動詞は先行する文脈にあるsome pizzaを含意するわけではない。

以上のように、定の場合は文脈依存で、不定の場合は動詞依存という関係が一般的には成立する。けれども、要因の組み合わせはこれだけではなく、別の組み合わせが見られる。

2.2. 定で語彙依存

まず、含意される目的語が定であって、文脈依存ではなく語彙依存である場合が存在する。wave, nod, stretch, shrugという動詞は、狭く限られた目的語を含意するが、その目的語は次の辞書の定義を見るとわかるように、主語と同一指示の所有代名詞を伴う定の名詞句である。

- (3) wave: move your hand from side to side in the air, usually in order to say hello or goodbye to someone [COBUILD]
 (4) nod: move your head downwards and upwards to show that you are answering 'yes' to a question, or to show agreement, understanding, or approval [COBUILD]
 (5) stretch: straighten your arms, legs, or body to full length [LDCE]
 (6) shrug: raise your shoulders to show that you are not interested in something or that you do not know or care about something [COBUILD]

同様の別の事例として、いわゆる再帰動詞がある(Fellbaum and Kegl (1989))。

- (7) a. William dressed/hid.

2.4. 定で語彙と文脈依存

定の目的語が含意される場合も、Fillmore (1986) が明らかにしたように、実際は単に文脈依存であるだけでなく、動詞にも依存している。例えば、find out という (複合) 動詞は定の目的語省略を許すが、discover は許さない。さらに、同じ open という動詞でも、「店を開く」という意味では目的語省略が許されるのに、「封筒を開ける」という意味では許されないという違いが見られる。

2.5. まとめ

以上のように、基準となる要因の組み合わせは、不定で動詞依存と定で文脈依存という一般的なものを以外にも可能であることがわかる。さらに、二つの一般的な組み合わせに関しては、実際にはさらに別の要因の作用が認められる。不定で語彙依存であれ、定で文脈依存であれ、さらに、それぞれ、性質は異なるが、文脈依存と語彙依存の要因がそこに付け加わるような関係になっていることがわかる。したがって、不定で語彙依存と定で文脈依存という一般的な二つの型は、実際には不定で語彙・文脈依存と定で語彙・文脈依存と言った方がより正確であるように思われる。

3. 型と成員

動詞が、どの型に属するかという点に着目すると、Lehrer が明らかにしたように、大体は、不定の目的語省略と定の目的語省略という大きな型に分類され、¹ 一部重複するものもあるが、排他的である場合が多い。けれども話者による変動が認められる。例えば、不定の目的語省略の代表的な例としてよく言及され、文脈依存の定の目的語省略は許されないとと言われることが多い。eat, drink, drive という動詞が、定の目的語省略に使われていると思われる例が存在する。²

- (10) On an impulse, I parked the car and went in and ordered a tuna salad on rye from the woman at the deli counter in the rear. We chatted idly while she busied herself with the sand-

wich preparations, wrapping my dill pickle in a square of waxed paper so it wouldn't make the bread all mushy, she said.

...

I ate while I drove, steering with one hand as I alternated bites of dill pickle and tuna sandwich. (Grafton (1997))

- (11) He freed the sandwich and gave it back to me.

"You've got a point," I said. I paused to eat while I reread the information. (*ibid.*)

- (12) The bartender set a mug of beer and a glass of wine on the counter. Dietz peeled off some bills and returned to the deck,... He said, "Service is slow. I hope the food's good." We touched glasses before we drank, though I wasn't sure what we were drinking to. (*ibid.*)

- (13) Everybody squeezed into the Sellers' minivan. Nancy drove. (Cook (1997))

これらの例においては、イタリック体で表示されている動詞が含意するのは、いずれも先行する文脈に存在する名詞句であると思われる。インフォーマントによると、(10)の eat は the sandwich and dill pickle, drove は the car, (11)の eat は the sandwich, (12)の drank は our drinks または our beer and wine, (13)の drove は the minivan をそれぞれ含意するということである。

上に示した例は、特に定の目的語省略を許す動詞の範囲を定めることの難しさを改めて示すものとみなしてよいであろう。

4. 目的語省略と動詞の相特性との関係

目的語省略、特に不定の目的語省略に動詞の相特性が関与しているということは先行研究において何度か言及されている。以下ではそのような研究のいくつかを取りあげて議論する。

4.1. Mittwoch (1971) と Browne (1971)

Mittwoch と Browne は動詞の語彙相 (lexical aspect) と不定の目的語省略

との関係に触れている。³

- (14) a. *Bill invented.
 b. *Max divided.
 c. *Selma ignited.
 d. *Bill devised.
 e. *John devoured.
- (15) a. *John drank up/down.
 b. *Mary ate up.
- (16) a. John drank.
 b. Mary ate.

彼らの結論は、完了を表す (completive) あるいは着点指向性 (goal-directedness) という特性をもつ動詞句においては目的語省略は起こらないというものである。「完了を表す」という概念と「着点指向性」という概念は、いわゆる完結性 (telicity) という概念で置き換えても問題はないであろう。(14) と (15) は対応する他動詞構文から目的語が省略された形である。この対応する他動詞構文は確かに、相特性は完結的 (telic) であるといえる。それでは、同じように目的語が省略されている (16) に対応する他動詞構文はどうかというと、(14) と (15) と同じように完結的な相特性をもつ。すなわち、「完了を表す (completive) あるいは着点指向性 (goal-directedness) という特性をもつ動詞句においては目的語省略は起こらない」という一般化は、実際には成立しないのである。事実上、(16) のように、省略が起こる場合と (14) のように、起こらない場合があるということである。(15) は (14) の同類とみなされているが、実際には、(16) のような非完結的な相特性を示す動詞には、完結の意味を表す不変化詞 (particle) は付かないという制約によると考えることができる。(17) と (18) を参照のこと。

- (17) a. Bill drank beer for two hours/*in two hours.
 b. *Bill drank up beer.
- (18) a. John ate at the apple for an hour/*in an hour.
 b. *John ate at the apple up.

ところで、Browne は、goal-directedness の特性を欠く他動詞は、不定の目的語省略を許すと述べて、drink や smoke や read がその例として挙げられている。けれども、これは、これらの他動詞も完結的な相特性をもつということと合わない。

まとめると、completive あるいは goal-directedness という概念が、完結的という概念と同じであるという理解が正しい限りにおいて、Mittwoch と Browne の主張は、どのような他動詞が不定の目的語省略を許すかという予測には役立つことが示されたと思う。

4.2. Brisson (1994)

目的語省略と相特性の関係についての分析は、Brisson (1994) にも見られる。Brisson は、動詞の出来事構造と Grimshaw (1993) による構造項 (structural arguments) と内容項 (content arguments) の区別を利用した、文法的な目的語省略の認可条件を設け、さらに、語用論的な目的語省略の認可条件も設けて、この二つの認可条件によって、sweep 類の動詞 (sweep, plow, pack, dust, vacuum, clean, mow, rake, study, read) と write 類の動詞 (write, knit, bake, draw, paint, sew, drink, type, dig, eat) の相違点を説明しようとしている。このうち、文法的な認可条件の方に、他動詞の相特性が関わっている。要約して述べると次のようになる。sweep 類は基本的には非完結的な (atelic) 活動 (activity) を表す。活動の出来事構造は単純な構造をしているとみなされる。また、sweep 類の動詞の内項 (すなわち目的語) は、意味内容に属する内容項なので、統語的に具現化される必要がないとみなされる。したがって、後は、文脈から復元可能であるかどうかという語用論の認可条件が満たされさえすれば、目的語の省略が可能になる。他方、write 類の動詞は、完結的な相特性を備えていて、その出来事構造は複合的であり、内項も構造項とみなされるので、統語的に具現化されなければならない。目的語の省略は不可能になる。

従来の分析では、write 類も不定の目的語省略の可能な動詞として扱われてきた。Brisson の分析では、理論上の理由から、そのような考えはとれなくなっている。その結果、write 類に関しては、自動詞の形は、他動詞の形とは関係なく、すなわち目的語が省略された形ではないものとして、独立して存在するものとみなされている。³⁾

Brisson の分析によって暗に主張されているのは、少なくとも活動を表す非

完結的な他動詞は、目的語省略が可能であるということと理解してよいであろう。同様の考えは、Hovav and Levin (1998) にも継承されている。Onozuka (2000) でも述べたが、一般的な傾向としては、非完結的な、活動を表す他動詞は、不定の目的語省略を受けやすいと言ってよいであろう。spin the wheel, use the car, feed the puppy などの活動動詞においては不定の目的語省略は許されないと思われるが、これは何か別の要因の作用によると考えられる。⁶

4.3. Olsen and Resnik (1997)

最後に、Olsen and Resnik も、目的語省略と相特性の関係について言及しているので、それを検討する。二人は、Mittwoch (1982) に言及して、内在的に完結的な動詞 (inherently telic verbs) は不定の暗黙の目的語 (indefinite implicit objects) と共起することは禁止される。なぜならば、不定の暗黙の目的語を伴う構文は、非完結的な、活動の解釈をもたねばならないからであると述べている。⁷

Olsen and Resnik の主張で問題になるのは内在的に完結的な動詞の定義である。定義は与えられていないが、おそらく Olsen (1997) の相の理論の考えに基づいた概念ではないかと思われる。それによれば、言語的および語用論的な文脈によって、完結的であるという相の特性が変わらない動詞のことである。

具体例は、Olsen によると、put, remove, send, give, hide などの、[+telic] という意味特性を与えられている動詞である。これらの動詞が文脈が変わっても相特性が不変であることは次のような例を使って示されている。

- (19) a. Margaret put a plate on the table.
b. Margaret put plates on the table.

(19) は put という動詞を含む文で、確かに完結的である。(19b) のような文は、出来事全体から見ると、終わりが伴わないので、普通は非完結的とみなされるが、Olsen はそのような考え方は採用しない。このような場合は、完結的な出来事が二つ以上あったことが含意されるということから、完結的な出来事の集まりであるとみなされる。⁸ したがって、(19b) のような場合も相特性は完結的であるというのが Olsen の考えである。

他動詞が、内在的に完結的であるかどうかの区別は、一部は、不定の目的語

の省略を含めた、自動詞用法の可能性に依存していることに注意する必要がある。例えば、普通は完結的な他動詞とみなされる eat や write などの動詞は、Olsen ではそれ自体は非完結的な動詞とみなされる。これは eat や write には非完結的な自動詞の用法（不定の目的語省略の結果）があることが1つの根拠になっている。このように、内在的に完結的な動詞の類は、一般に考えられている完結的な動詞の類よりもその構成員がずっと狭められる。

この内在的に完結的な動詞という概念は、それなりにうまく機能することは認めなければならない。先ほど紹介した、不定の暗黙の目的語を伴う構文は、非完結的な、活動の解釈をもたねばならないので、内在的に完結的な動詞は不定の暗黙の目的語と共に共起することは禁止されるという制限は、例えば (14) のような例を説明するのに有効であるかもしれない。実際には許されない形ではあるが、理論上は、目的語がなくても、その完結的な相特性は変わらないと予測されるからである。

内在的に完結的な動詞という概念に基づいた、不定の目的語省略に関する制限に問題はないかどうか調べてみるために、devour と gobble という動詞を取りあげて考えてみよう。これらの動詞は、普通は完結的とみなされ、しかも eat とは違って、不定の目的語省略は許さない。これらが内在的に完結的な動詞であれば、Olsen and Resnik の予想通りに、不定の目的語省略は不可能であると言えることになるが、実際にはそうならない可能性がある。次の例がその根拠になる。

- (20) a. Eight-year-old Clarke Saunders devoured shrimp cocktail, lobster, swordfish, clam chowder and French pastries.
(Ogintz (1993))
- b. As she collected her new belongings, the children gobbled ice cream and cookies and discussed their summer plans.
(Smith (1993))

(20)においては、devour と gobble が目的語として不可算の質料名詞を伴う不定名詞句をとっている。このような場合は、(19b)のような不定の複数名詞句を目的語をとるときと同じように、普通は、非完結的な出来事を表すとみなされる。しかしながら、この場合は、不定の複数名詞句を目的語とする場合と違って、完結的な出来事の反復とみなすのは無理であると思われる。全体で終わり

を伴わない非完結的な出来事を表していると考えられる。この観察が正しければ、これらの動詞は文脈の変化に伴って相特性が変化することになるので、内在的に完結的な動詞とは言えなくなるはずである。そうなると、Olsen and Resnik の主張が Olsen の相理論に基づいているという仮定が正しければ、devour と gobble は不定の目的語省略が不可能な動詞とは言い切れなくなるという問題が生じる。

4.4. まとめ

不定の目的語省略と語彙相との関係を扱ったいくつかの先行研究を取りあげてその提案を検証したが、細かな問題はあるにしても、ある程度一般性のある関係としては、語彙相が非完結的な、活動を表す他動詞は不定の目的語省略（あるいは不定の目的語を含意する自動詞用法）を許すというものと、語彙相が内在的に完結的な他動詞は不定の目的語省略（あるいは不定の目的語を含意する自動詞用法）を許さないというものの二つがあると言えるであろう。

注

*インフォーマントとして協力いただいた John K. Varden 氏に感謝申し上げます。

1. ここでは従来の一般的な二つの型の分類に従うことにする。
2. Olsen and Resnik (1997) は、eat が定の目的語も含意する場合があることを指摘している。
3. 両者ともイディオムと不定の目的語省略の関係についての議論が本題であるが、ここでは本論と関連のあるところを抽出してまとめてある。
4. read は Brisson (1994) では基本的には非完結的とみなされているが、完結的な読みも可能である。
5. Brisson の分析に関するもう少し詳しい説明と問題点の議論については Onozuka (2000) を参照のこと。
6. 例えば、use の場合は、選択制限の観点から、特に強く結び付く目的語がない (Resnik (1996)) ということが1つの要因として考えられる。
7. ついでに触れておくと、Mittwoch (1982) にはこのような主張は見あたらない。主旨の点で近い主張が認められるのは、先に触れた Mittwoch (1971) の方である。
8. Olsen は (19b) のような場合を非完結的な出来事とみなすと、完結的な出来事が2つ以上含まれるということが説明できないと主張するが、これは的はずれであると思われる。と

いうのは、(19b)が非完結的であるというときに意味されることは、全体として完結しないということであり、個々の出来事までもが完結していないということではないはずだからである。

9. *devour* に関しては後の議論を参照のこと。

参考文献

- Allerton, D.J. 1975. Deletion and proform reduction. *Journal of Linguistics* 11, 213-237.
- Allerton, D. J. 1982. *Valency and the English Verb*. London: Academic Press.
- Brisson, C. 1994. The licensing of unexpressed objects in English verbs. *CLS 30: The Main Session*, 90-102.
- Browne, W. 1971. Verbs and unspecified NP deletion. *Linguistic Inquiry* 2, 258-259.
- Fellbaum, C. and J. Kegl. 1989. Taxonomic structures and cross-category linking in the lexicon. *ESCOL '89*, 93-104.
- Fillmore, C. 1987. Pragmatically controlled zero anaphora. *BLS* 12, 95-107.
- Grimshaw, J. 1993. *Semantic structure and semantic content in lexical representation*. ms., Rutgers University.
- Hovav, M. R. and B. Levin. 1998. Building verb meanings. Butt, M. and W. Geuder (eds.), *The Projection of Arguments*. Stanford, California: CSLI Publications, 97-134.
- Lehrer, A. 1970. Verbs and deletable objects. *Lingua* 25, 227-253.
- Mittwoch, A. 1971. Idioms and unspecified NP deletion. *Linguistic Inquiry* 2, 255-259.
- Mittwoch, A. 1982. On the difference between eating and eating something: activities versus accomplishments. *Linguistic Inquiry* 13, 113-122.
- Olsen, M. B. 1997. *A Semantic and Pragmatic Model of Lexical and Grammatical Aspect*. New York: Garland Publishing, Inc.
- Olsen, M. B. and P. Resnik. 1997. Implicit object construction and the (in)transitivity continuum. *CLS 33: The Main Session*, 327-336.
- Onozuka, H. 2000. Lexical aspect and object deletion. *Studies in Languages and Cultures* 52. Tsukuba: Institute of Modern Languages and Cultures, University of Tsukuba, 1-20.
- Resnik, P. 1996. Selectional constraints: an information-theoretic model and its computational realization. *Cognition* 61, 127-159.
- Rispoli, M. 1992. Discourse and the acquisition of *eat*. *Journal of Child Language* 19, 581-595.

例文出典

Cook, R. 1997. *Invasion*. Berkley Books : New York.

Grafton, S. 1997. *"M" is for Malice*. Pan Books : London.

Ogintz, E. 1993. Cruise issue : kids aboard. *Los Angeles Times*, March 28, 1993.

Smith, L. 1993. The boys & girls of summer. *Los Angeles Times*, June 18, 1993.

辞 書

COBUILD=*Collins COBUILD on CD-ROM*.

LDCE=*Longman Dictionary of Contemporary English*.